

MASKが始める異世界生活

中井契

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何をやってもダメダメな冴えない男、美鳥正治。

残業を終え、一人帰路へ向かっていると川から変な仮面が流れてきた。正治は不思議に思いそれを拾うと仮面はまばゆい光を放ち光は正治を包み込んだ。気がつくとは彼は異世界へと飛ばされ、様々な苦勞を強いられる。ヤケクソになった彼は謎の仮面を

.....

目次

第1話	さようなら地球。 こんにちはは異	
世界。		1
第2話	ヤッホー!!俺だよ!!	16
第3話	あれ?俺もしかして疑われて	
るう?		25
第4話	緑の変人と鬼とその姉と犬と	
34		
第5話	緑の変人と鬼とその姉と犬とそ	
の2		38

第1話 さようなら地球。こんにちは異世界。

「全くまたか!? またお前なのか!? なぜこれくらいのことまできんのだ!!」

「すいません!! 直ぐに修正しますので!!」

この上司に必死に謝ってるダメダメな男が僕、美鳥正治だ。

「オイオイまたかよ。全くアイツはいつもノロマのミドリだな」

すると僕の同輩の山口がいつものようにわざと聞こえるように言ってきた。

くう……! 言いたい事ばかり言いやがって! でも何も言い返せない! なんて僕はこんなにも自分を出せないのだろう。そもそも本当の自分って何だ? 何を持って本当の自分って言えるんだ?

「つたく……もういい! さっさと自分の持ち場に戻れ!」

「はい! すみません!」

僕はサササツと戻り自分の席へと着いた。

クスクスと僕を笑う声が聞こえる……。ハア、このままだとまたあのパターンかな。

「それじゃあなー美鳥。残業頑張れよー」

山口は嫌味つたらしく僕に言った。すると周りの女性社員が

「やーん山口さんやさしー!」

この子も嫌味を込めて言ってるんだろなあ。

「当然だろ?俺はアイツの同輩だからな!」

クソツ!何が同輩だ!とつくに僕よりとんでもない成績上げているくせに!

その後僕は時間を数えた訳ではないが5時間以上かかってたような気がする。ようやく残業を終わらせた。もう自分が起きているのかも分からない。

トボトボとお父さんとお母さんが見たら情けない背中を見せながら僕は歩道を歩いていた。

そういえば、もうすぐあの場所かな……………。

こんな僕にもちよつとした楽しみがある。それは……………

「着いた。今日も綺麗だなー」

それはここに、僕がいつも通る帰り道には川がある。その川はビルの光や電柱の光、この街の光が全て集まったような川の流れや波紋を見るのが僕の生きる気力になってる

んだ。

「僕はこのまま何も成し遂げられないまま生きていくのかな……………」

不意に口から出てしまった。心の底で思いたくない事を、思ってしまった。

僕がより一層ネガティブな雰囲気になっていると

「あつ」

あれ……………ここに来る人居たんだ。黒っぽいジャージを着た、三白眼が特徴のどこにでもいるような少年だ。

「……………どもつす」

「ああ、こんばんは」

……………気まずい。もしかしてさっきの聞かれてたかな。

「俺も好きなんすよ。……」

「へえ、そうなんだ。ここに気づいてるの僕だけかと思ったよ」

良かった。何とか明るい話題に持っていく事が――

「さっきのつて……………」

……………

「ああ不意に出ちゃってね。僕、いつも会社行っても同期にバカにされて、上司には必死に頭下げて媚び売って。」

誰かに誇れるようなものはないんだよ」

「ツ……！そう……すか」

ヤバイ。何かマズイ事言ったかな。

「でも、僕は生きる事には意味があると思うんだ」

「意味？」

「うん。僕、さつきも言った通り同期にも上司にもバカにされてるけどやる事は沢山あるんだ。それは僕の代わりがあれば出来る仕事だけど、誰かが僕を必要としていてその期待に応える事が出来る。それだけでも生きてるって実感があるんだ」

「生きてる実感、すか……」

「だから、さ、君も何かに熱心になれるものを探してみたらどうかな」

「……………そうっすね。なんかアンタの言葉聞いてたら元気出てきた。ありがとな！オツサン！」

「オツ、オツサン……………」

「それじゃな！また会おうぜ！」

そういうとあの子は走っていった。……………何か頬に伝ってたのは、僕の気のせいだろうか。

「あれっ……………なんだろう」

僕が帰ろうとしてたら川から何か流れてきた。

僕は特に急いでいないが何か気になったから降りてみた。

「なんだこれ……………」

僕は川から流れてきたものを眺めてみる。これは仮面か何かかな？多分木で作られてる。でもなんか怪しい雰囲気がある……………。僕が仮面をまじましと見つめていると

「うわっ!?何だこれ!?眩しー」

仮面が突然発光して周りが見えなくなった。

「ん……………うう……………えっ!?」

あれ。なんで僕こんなヨーロッパみたいなところにいるんだ!?まあ行ったことないけど。

あたりを見回してみると独特な衣装に身を包んだ人達が沢山いた。しかも明らかに人間じゃない人もいるし。

「これは……………最近流行りの……………」

僕はがつくりしながら

「異世界転生つてやつかよオ!!??」

今まで生きてきた中で一番大きな声を上げた気がする。

「ハア~~~~もう勘弁してよ!!なんでこんな目に……………」

まあ来てしまったものはしょうがないのかな。今僕が持つてるものを確認しよう。

カバン、スマートフォン、会社の書類、ペン、財布、一本の缶コーヒ―。

こんなんで生きていけるのか？いいや無理だよ。これは無理だ。少なすぎる。携帯食料とか持つて来れば良かったよ。

「おいオッサン！死にたくなきゃ持つてるモン全部置いてきな！」

僕の前に現れたのはいかにもなチンピラだった。

「ごめん。今はそんな気分じゃないんだ。ほっといてくれ」

「ああつ!?ナメた口聞いてンじゃねエぞ！」

僕の言葉にキレた3人組は

「コイツやっちまうぞ！」

あー完全にやる気だなあこれは。

僕が自分を客観視する癖がある。この現状を受け入れたくないから自分を外から見るんだろう。

僕がとつくに絶望しているその時

「どいた！どいた！おつ!?なんか凄いことになってんな！」

僕の前に現れたのは小柄で金髪の少女だった。何やら手には何か持っている。

「悪いな兄ちゃん！強く生きろよ！」

チンピラは慌てふためいている。あれ!?この空気ならもしかして……………

「さあ私の徽章を返しなさい!」

違う目的だった。

「徽章なんてしらねえよ!あつもしかしたらさっきのアイツかもしれないぞ!」

「えっ!?!違うの!?!どうしようパツク!?!」

『そこは君に任せるよりア。君がしたい事をすればいいさ』

あれなんだ?猫!?!猫が宙に浮いてる!?!

「そうね……………でもこの状況は見逃せないわ。今すぐ辞めれば痛い事はしないであげ
る」

あつやった!もしかしたら助けてくれるかも!

「やってやる!相手は女一人だ!」

3人が一気に襲った。すると女の子が巨大な氷を作って相手にぶつけた。

「グフウ!?!」

まともにぶつかったチンピラは動かなくなった。し、死んでないよな?

「「覚えてろよオオオ!!」」

三流が吐きそうなセリフを残しながらチンピラ達は去っていった。

「ハア……………助……………かつ……………たあ……………」

僕は安心した。いや、し過ぎた。

「べ、別に可哀想だから助けてあげた訳じゃ……………つてあれ？気絶してる？」
僕はそこで意識が途絶えた。

「うーん……………ん？」

僕は目が覚めた。何分くらい寝てたんだろう。まだ夢の中だからなのだろうか巨大な猫ご僕に膝枕している夢を見ていた。

『夢じゃないよ』

「うわあお!？」

「もういきなり気絶したからびつくりしちやった」

「君が助けて……………くれたのか？」

「別に助けてあげた訳じゃないんだから。あなたから私が探している情報を聞き出す為に助けたんだから」

素直じゃないのかな。助けたなら助けたって言えばいいのに。

「そういえば何か探してるの？」

僕はさりげなく聞いてみた。すると女の子はそうだわ!と立ち上がり

「そうよ!徽章よ!私の徽章知らない!?大切な物なの!」

と僕を思い切り揺さぶりながら聞いてきた。

「ちよ、ちよつとまつて、落ち着いて。それ以上揺さぶられたらヤバイ……!」

「あつ!ごめんなさい!」

クラクラする頭を抑えながら僕は立ち上がった。

『あれっも面白いの?』

「デカイ猫が僕に聞いてきた。

「うん。もういいよありがとう。そういえばさ、何か探してるとか言ってたね。僕も手

伝おうか?」

「えっいいの!」

あつ嬉しそうな顔した。これは意地でも探さないと。

「うん。助けてもらったし」

「ありがとう!」

うおつ!20歳過ぎの童貞にこの笑顔はキツイ……!

「ここじゃなんだし、歩きながら話そっか」

「わかったわ」

それから僕はこの街の事について教えてもらった。やはり異世界転生したらしい。信じたくなかったけど。

「そういえばさ君の名前ってなんなの？」

名前を聞くと顔を暗くした。あれ……なんかマズイ事聞いたか…？

「……サテラよ」

『リア……』

「サテラか……いい名前だね！」

「えっ……？」

「?」どうかしたの？」

「いい、いいなんでもないわ。行きましょう？」

僕は普通なら時間がかかりそうな人探しを1時間で終わらせた。

「セイジすごい！もう見つけたなんて！」

「へへっ。これでも鬼ごっここと隠れんぼとかは見つけるの早かったんだ」

足の速さと逃げ足と情報収集だけが取り柄からな。

「ここか……それじゃあ入ろうか！」

「ええ！」

ガチャリと扉を開けた。そこには巨人か！と言いたいくらいの身長の子とさっきの

金髪少女がいた。

「あー！お前さっきの！」

「なんじやお前ら！」

「突然申し訳ありません。私はその徽章の持ち主の同伴者の美鳥正治と申します」

「あつこれはご丁寧にどうも」

決まった。親に必ずやれと言われ続けた俺の必殺技

挨拶だ。だがまだ終わらない。

「大変申し上げにくいのですがそのお孫さんが持っている徽章は実はこの子の持ち物として、お互い穩便に済ませたいのですが……」

「お、おいそれはホントかフェルト？」

「流されてんじやねえよロム爺！口車に乗せられるぞ！」

ちつ。うまくいかなかったか。

「分かりましたよ。渡す気は無いという事ですね？だったら物々交換しましょう！」

物々交換？と3人ははてなマークを浮かべる。

「ね、ねえセイジ？あなたがする必要はないのよ？元々盗んだのはこの人たちなんだから」

「いや、いいよ。出来れば穩便に済ませたい」

そう言つて僕が取り出したのは僕の相棒、スマートフォン。

「なんだこれ？」

「これは写真を撮れるんだ」

「写真つてなんだ？」

あつそうか分かるわけないか。

「まあ写真つていうのは言つてしまえばその瞬間の風景をこの中に収める事が出来るんだ」

さらにはてなマークを浮かべた3人に僕は行動を移す事にした。

「まあいいかい？よく見ててよ？」

僕はそういうと全員と集合写真を撮った。うん、こう見るとなんか家族に見える。

「とまあつまりはこんな感じさ」

「へえくすつげえなこれ。ロム爺！これ売ったらいくらになる？」

ロム爺と呼ばれる巨人みたいなじいさんはスマホをまじまじと見ると

「これなら聖金貨20枚は下らないじやろう」

「マジかよ!?!」

よし。このままうまくいけば！

「だけどこの徽章には取引相手がいるんだ。だからそいつが来たらー」

皆は見えてなかったけど部屋をくまなく見てた僕にはわかった。ここにはあともう一人いると。

「危ない!!」

僕は金髪の女の子を押し退け身代わりになった。

「痛う………えっ?………う、うわああああああああああああああああああああああああああああ!!ち?ち?血い?!?!こ、ここここここれ全部僕の血イ?!?!」

僕は自分の血を見て発狂した。ああ。身代わりなんてするんじやなかった。

「私は徽章を欲しいとは言ったけど持ち主を持ってこいだなんて一言も言っていないわ」

黒紫のドレスのような物を着た女が現れた。音を立てずにどうやって?

「なんで私の事かばったんだよ?! 私は一回見捨てたんだぞ?!」

僕意識が途切れ途切れになりながらもかすれた声で

「そりやあ………女の子が殺されそうになつたら………助ける………でしょ………」

ああ、もうダメだ。僕もうココで終わりみたいだ。童貞卒業も出来ず、何か凄い事をするでもない。何もない空っぽのガラクタのような人生。そもそもなんでこんな事? あつサテラ戦つてる。もう感覚なくなつて来た。

ゴットンツ。

あれ……………確かコレって僕が川で拾った変な仮面……………。

僕は腹を抑えながら手を伸ばす。こんなのに自分の人生を託さなきゃいけないのかと思うと笑いが止まらない。

「えっ?」

今光った? 気のせいかな? そういえば僕がこの世界に来たのもコイツが原因で……………。

……………一か八か、やるか。

俺は覚悟を決め、仮面を手に取りそれを――

装着した。

第2話 ヤッホー!!俺だよ!!

「楽しかったー!ねえセイジ!すっごく楽しかったけど顔色やつぱり悪いと思う。大丈夫なの?」

汗をかき運動をしてスッキリしていたエミリアがセイジに心配する。

「何を言ってるんだmy honey!!俺はいつだって絶対調さあ!んっんっくでももう少し人が多い方が良かったかもしれないやあ?」

先程とは打って変わってやたらテンションの高い顔が黄緑色のセイジが答えた。

『ねえホントにどうしたの?さっきまでボクがデコピンすれば1発で死にそうな顔してたのに』

「なんだとおう!?!ならためしてみようか!ヒイヒイ言わせてしんぜよう!」

セイジ?は口元をアイアイアイと言わせながら答えた。

「いやああんなに踊ったのは久しぶりだよ!それにしても凄かったなああの時は。まさか街の人々全員が集まって踊るなんて」

騎士ラインハルトが感嘆の声を上げる。

誰かが言った。そして、

「ラリッホー!皆元気にしてた!?なになに?大腸ちゃんのはみでてないかって?大丈夫出てないよ!どこぞのアバズレが俺のお腹くんをひっさいてったけどな!」

アイアイアイと口を鳴らし陽気に鼻歌を歌っている。しかもよく見ると先程と服装が違う。サラリーマンの一般的な服から全身赤の派手な紳士服を着ている。

「貴方……………さつき確かにお腹は引き裂いたはず……………」

「ああそうさ!確かにお前に腹を引き裂かれ、絶体絶命になったよお!」

セイジ?は頭から火山を噴火させ拳をパキパキと鳴らした。

「決めたぜ!お前には相応の報いを受けてもらおうか!」

「あら?確かに傷は治ったけど武器も持たずにどうする気かしら?」

ウーン!

「!?これは……………!?」

どこから出たのかエルザは縛り付けられ固定されている。

あたりには蠟燭やムチがあつたりなど穏やかな雰囲気ではない。

「ここから先はR指定!観客の皆さんは目と耳とアソコを押さえておくことをお勧めするよ!」

「な、なにをするつもりかしら?言っておくけど私痛みには耐性があるのよ?だからこ

の程度の事でー」

「大丈夫、痛みとは程遠いからネ。多分別の意味でぶっ飛ぶんじやないかな?」

「ちよ、ちよつと待っていきなりそんなああ!」

ナニをされているかはカーテンが張られてあるため見えないが大体声で何をされているかはわかる。そう、ナニだ。

「そしてお次はこれー! ジャジャジャン! これは何を使うか分かるかな?」

「えつ……………し、知らないわそんなの!」

「はいフセイカーイ。罰としてコレでも喰らえい!」

「ああああああああ?!?! ダメこれ以上はアアアアア?!」

「ごめんちよつと何言ってるが分かんない」

一連の流れを見てロム爺は唾然としている。フェルトは顔を赤く染めながら「何やってんだよ! もうやめてくれよ!」

顔をうずめている。

「ねえ何やってるか分かる? パック」

『……………リアにはまだ早いかな』

「?」

「も、もうダメエ……………許してえ……………」

「お前は今まで許しを請うた相手に情けをかけた事はあるか?」

一瞬だけ氷よりも冷たい目をしていたのは誰が見ても分かった。だがそれは一瞬で直ぐに素に戻る。

「なあ〜なんてそんな辛気臭い事は置いてとりあえずう

もうワンラウンド、続けよっか?」

エルザの周りにはグイングインと動いているアレやブブブブと振動しているアレが沢山ある。

「イ、イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ふう〜スッキリ!これで腹をかつ裂かれた分は取れたぜえい!!」

カーテンが開けツヤツツヤのセイジが出た後ろには一瞬だけだがエルザがチラツと見えた。まあ見るに耐えない姿だが。

「せっかく異世界から来たことだし、ダンスパーティーとでも洒落込もうぜエ!」

「はっ?ダンスパーティー?」

「はい、ミュージックスタートオ!」

どこからか音楽が流れ始めた。もちろんここにはラジカセもスピーカーもあるわけではない。だが聞こえるのだ。軽快なメロディが流れついつい口ずさんだり踊りたくなるようなリズムカルな音が。

「ハイハイその寝ぼけてる人もどうぞご一緒にイ？」

「もうやめてえ……私が悪かったからあ……」

「何言ってるんだ？これから俺達はダンスを始めるんだぜM.S. エルザ姫？」

先程まで伸びていたエルザを勢い良く起こしエルザを回転させる。すると先程とは違った服を着ていた。黒とは真逆の白いドレスで頭にはティアラをつけている。

「さあさあその口をガバーつとだらしく開けているその3人！君達も踊るんだよお！」

そう言われて指を刺された3人は

「あ、あれ!?体が勝手に!？」

「どうなつとるんじやこりゃあ!？」

3人も踊り出しそしてさらには

「さあ皆集まれエ~~~~~!!」

顎がありえないほど開きとてつもなく大きな声を出した。ボタンと勢い良く扉を開ける音が聞こえた。

「あっラインハルト!どうしてここに?」

「いや何か呼ばれた気がしたんだけど……なんだこれは!?体が勝手に!それに貴方は腸狩りのエルザじゃないか!こんなところで一体何をー」

「とりあえずそれは置いといて今夜は楽しもうぜえい!

おっと!お客さん達も来る時間だ」

ドタドタと沢山の足音が聞こえてくる。1人の男や女、それに子供までも入ってきた。だがこの盗品蔵には人がそんなに沢山入ってこれる場所ではない。

「とりあえずこの小汚いパーティ会場じゃ入らないし一旦外に出ようぜ?野郎共オー!」

そこから先はまるで何かめでたい事があったのかのように入々は踊りに踊った。しかもこの国の音楽ではなくセイジが日本にいた頃の80年代のディスコなどで踊られていた曲である。彼は本当に20歳なのだろうか。

「ハイハイ最後に!お前に襲って来られるとめんどくさいから今度は正真正銘ぶっ飛んでもらうぜ!」

エルザと共に踊っていたセイジがポケットから取り出したのはどう考えても入りきらない砲台のようなもの。そこにエルザを……

「それじゃあ俺の考えた旅行プランを楽しんでねえ!!バイバイ!!」

そして導火線に火をつけ……

ドオン!!

吹っ飛んだ。吹っ飛んだものを気にしていなかった人々はセイジに歓声や拍手を送る。

「ありがとうございます！ありがとうございます！ありがとうございます！このような事でも喜んでくれたら感謝感激マシンガンでございます!!」

そう言つてセイジは涙を流しながらいつのまにか自分で用意したトロフィーを持っていた。

「さあてこれにてお開き！皆さんおつかれさん！ほらもう帰つて良いぞー」

そう言われると人々は帰り始めた。彼等はなぜ踊っていたのか気にも留めてなかった。

そして今に至る。

「セイジさん、あの腸狩りのエルザを撃退してくれたのは嬉しいのですが捕まえないとまた次の犠牲者が出る可能性があったのですが……」

「その必要はなアい！今頃自分のプライドをズタズタにされて腐っている頃だろう！」

とさらりとえげつない事を言つたセイジは

（この力……このスーパーパワーがあれば俺は……スーパーでハイパーなヒーローになれる事間違いなしだア！）

1人マスクの力に喜んでいた。

こうしてマスクを手に入れた青年はこの異世界でふざけにふざけ、そして人を笑顔にするスーパードライバーなアルティメットヒーローになる。これはその序章に過ぎない。

第3話 あれ？俺もしかして疑われてるう？

「んうう……………」

全く気持ち良さそうには見えない寝顔でセイジは唸る。

そしてさらに顔にシワが入り

「すみません！直ぐにやり直します!!だからクビにはしないでくださいあい!!」

ガバツと起き上がった。今までの事は夢だったのかと理解するとセイジは改めて安心した。だが

「姉様姉様、お客様だったら何を言うかと思えばいきなり社畜のような発言をしました」

「レムレム、この人本当に昨日のお祭りの主催者なのかしら？雰囲気全然違うと思うのだけれど」

朝から辛辣な言葉を受けて若干ナーバスになったセイジは

異世界に來た事は夢ではなく現実だという事を思い知らされた。

(もし戻れなかったらあの川も見れなくなるのか?)

もし戻れなかったら……………とセイジは最悪の展開を想像する。会社帰りの唯一の癒

しを奪われた事にさらに落ち込みながらもセイジは現実を受け入れようと努力する事を試みる。

「あの一、ここはどこなの?」

と僕が双子のメイドさん達に聞くと

「ここは我が主のロズワール様のお屋敷ですお客様。ロズワール様も昨日の件で貴方と会う事を待ちにしております。お洋服を変え次第、食堂に向かってください」

うゝん昨日の件って何だ?何も覚えてない。ヤケ酒でもしてたのかな?

僕は直ぐに起き上がり服を着替え、部屋を出た。出たは良いんだけど。

「……………どうなってんだこれ。全然着かないぞ」

僕は途方にくれる。朝起きた途端に歩き回ってたらいつまでたつてもたどり着かない迷路だつて?もうどうなってんだこの世界は。

「あれ……………いつの間に僕この仮面……………」

自分でも気がつかないうちにこの変な仮面を持ってきてしまった。……………あつ!そうか僕昨日この仮面被って……………

セイジは昨日の出来事を全て思い出した。

だからこの屋敷の主さんも僕に会いたがっていたのか。

でも僕がそんな大それた事出来るわけない。アレは僕じゃない。……………いやでも待

てよ？　そういうえば人は心に常に仮面を被っている、とか聞いた事あるな。……………あんなま信じたくないけどアレが僕の本性だってことか？

「嫌だアアアアア！　あんなのが本当の僕だなんて信じたくない！」

そう僕が自分でもやかましいと思う声で自己嫌悪していると

「朝からうるさいのよ。さつきから一体なんなのかしら」

扉から出てきたのは背が小さい金髪のドリルみたいなツインテールをした女の子だった。

「えっ……………人いたんだ」

「いないわけではないのよ」

あつもしかしたらこの子出口知ってるかも。

「あのさ、ここの主の人知らないかな？　確かロズワールさん……………だっけ？」

「ふん。そんな事かしら。それなら後で教えて……………ってその仮面はなんなのよ？」

ドリルツインテールの子は僕の持つてきていた仮面を指刺した。

「…今失礼なあだ名が聞こえた気がしたのよ」

「気のせい気のせい」

「そういうえばそれ！　それはなんなのよ!？」

話が逸れた事にござ立腹のドリルツインテールはひたすら指を指す。

「それから何か変な感じがするのよ。何かもつと凄い感じのね!」

「ええ?そんな事言われてもなあ……あつ強いて言うならこれをつけると頭がおかしくなるくらいしか分かんないなあ」

変な仮面を持っているものねとドリルツインテールの子が言う。そういえば名前聞いてないな。

「君の名前は?」

「教えてやる義理もないって言いたいところだけどその仮面の事についても教えてもらったしいいわ。私の名前はベアトリスなのよ。覚えておくがいいかしら」
ベアトリスか……なんかクマにあだ名つけたみたいだな名前だ……。

「ちよつとそれ貸してみるのよ。試したい事があるかしら」

「そう言われ僕はホイホイと仮面を渡してしまった。それがいけなかった。

「そりゃ!」

「んむう……?!?!?!」

仮面を押し付けられてしまった。

仮面をつけられた瞬間突然回転し始め、ゴロゴロと雷の音が聞こえ始めた。

「ただの仮面じゃないとは思ってたけど……ここまでとは思ってなかったかしら……」

禁書庫の中で回転しまくっていたセイジはやがて弱くなり遂に止まった。

「ハア、イそこの勝手に俺に仮面をつけたお嬢ちゃん！せつかく会えた事だし記念にコレをあげよう！」

そう言つてセイジが渡したのは地球では当たり前前に売られているチューインガム。

「なんなのかしらこれ？」

「コレは俺の国でチヨー人氣のチューインガムつてゆるヤツさあ！食べば病みつきになる事間違いなし！ハイドローズ」

「ふん、少しは気がきくのかしら。それじゃあ一口……………」

「おつと言い忘れてタア！それは飲み込む食べ物じゃないからネ！あとちよつとこつち見ててくれ……………」

とセイジがガムについての説明をしてる間にベアトリスは話を聞かずにガムに集中していた。

「こつちを見ろオ！」

「うるさつ！そんな怒鳴る事ないじゃない！」

「良いから良いから！ほら見てろよ？」

そう言つてセイジはガムに空気を入れ、膨らませた。

「な、何なのよそれは!」

「コレは風船ガムって言うんだ。ほらやってみたらどうだ?」

とセイジが説明を終えるとベアトリスは一生懸命空気を入れた。一見微笑ましい光景だがこのマスクをつけているセイジがタダでそんな事をするはずがない。

「?膨らみすぎて来たのだけけれど。コレはどうすれば良いのよ?」

ベアトリスは風船ガムを自分の身体と同じサイズまで膨らませてしまった。

「そんなの自分で考えなさい!自主性を大事にしなきゃダメなのよ!」

と支離滅裂な発言をした。

(こ、このままじゃ流石にやばいのよ……………。どうにかしてコレを割った後コイツにキツイのー発喰らわしてやらなきゃ!)

「ベアさんダイジョブ?」

(コ、コイツ…!)

ベアトリスは何とか風船ガムを割り無事着地した。

「何か言い残す事はあるかしら?」

とベアトリスはいつでも始末出来るように魔法を待機させていた。

「でも美味かっただろ?」

「…ツ!一瞬であの世に送ってやるから覚悟するのよ!」

と言い魔法を放ったベアトリスを見たセイジは

「ワアーーーーー！！！！」

と皮膚と骨が飛び出るくらい驚いた。だがすぐに素に戻り

「ワオ！こんな遅いんじゃないや俺をクツ殺……！せないゾオン？」

「憎たらしいヤツなのかしら！」

遂にキレたベアトリスは屋敷が全壊しない程度の魔法を放った。

「ワアホタルだア！ママ見て！ホタルがたくさんいるよ！」

とバネみたいな動きをしながら逃げていた。そしてそこらにあつたホウキに乗り

「さあ行くのよホウキちゃん！貴方の力を見せてやりなさい！」

と踵で二回蹴った。するとホウキは突然宙を舞う。

「ガム風船作つてるの可愛かったよオオオー！！」

「殺す！殺してやるのかしら！」

ものすごいスピードで無限回廊を駆け抜けて行った。

「よおし着いたゾオン！やっぱり自分を曲げずに真っ直ぐ生きる事が大事だよねえ」

ん！！

バアン！と勢いよくドアを開ける。

「あれ？セイジ随分遅かったじゃない。何かあつたの？」

「ああごめんよ!俺ちよつと金髪ロドリルに贈り物したただけなんだ!許してくれえ
!」

「ちよ、ちよつと!そんな謝らなくても!」

「ホントに?こんなクソザコ変態黄緑マスク野郎を許してくれる!」

「もう!そんなに自分を卑下しないの!それよりロズワールが貴方に会いたがってたから、一緒に話してあげて」

とエミリアがロズワールに視線を向ける。

「やあきくみが昨日エミリア様を助けただけではなく一連のお祭り騒動を起こしたえ
と」

「ふむ……:そうだア!俺の事はマスクと呼んで構わないゼエ!」

「いやいくや君の本当の名く前だよ。流石に名前くらいはあるだろう?」

と言われて若干ショックを受けつつもセイジは自分の名前を答えた。

「ミドリセイジ、それが俺の……:名前くだぜ!」

「やつぱり変な名前してるかしら」

そこには少し怒り気味のベアトリスも来ていた。

「まあそんなきくみに何か一つほくうびをあげよう。何がいくい?」

なんでもと言われてないが勝手に解釈したセイジは大胆な行動に出た。

「そうだな……俺は今無職だからここで働かせて欲しい。そして……」
エミリアに近づき……

「このマイプリンセスと結婚することデースッ！」

「『!?』」

見せつけるように堂々と熱い抱擁をしながらキスをした。

第4話 緑の変人と鬼とその姉と犬と

ここにゐる者達は驚き、慌てふためいている。なぜかつて？それはオイラがこの子に
 デイープであつういキスをしたからさあ〜！

「ふえ……………?!いきなり何を……………」

あまりの突然の出来事にエミリアは脳が働かず目が回りながらまとまらない思考を
 なんとかまとめようとしたが

『殺す……!』

一連の様子を全て見ていた父も同然の精霊パックが突然無数の巨大な氷を生成しセ
 イジにそれを向けている。

「ウアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

再び皮膚と骨と目玉が飛び出たリアクションをした。

「子猫ちゃんはこれでも食つてナア!」

がすぐに元に戻ったセイジが出したのは猫なら皆大好きマタタビである。元々殺す
 気ではあつたが今の行動を見てさらに殺意が溢れ出したパックは絶対に殺すと誓いセ

イジに氷をぶつけようとしたが

『ツ!? 身体が勝手に!?!』

やはり猫の外見をしているからか単にセイジの力なのかパツクはマタタビに手を出そうとしていた。だがセイジはマタタビを持ったまま

「これが欲しい!?!これがええのか!?!これがええのんか!?!」

マタタビをブンブンと振り回し、パツクのギリギリの所まで近づかせパツクが取ろうとしたところをヒュツと取り上げるといふ動作を繰り返していた。そして遂に

「ほうら取ってこい!!」

遂にマタタビを投げた。だがこの屋敷を汚してしまうとこの道化師みたいな家主に怒られてしまうかもしれないためあらかじめ窓を開けて庭に投げた。

『待って〜! 僕のマタタビ〜!』

ぴよんとジャンプして窓から飛び出ていった。

「さて! 邪魔者は消えたことだし俺はこれからここで働かせてもらおう!」

セイジは改めて仕切り直しとでも言うように両手をパンと合わせ話を進めた。

「俺が求めるのはこのマイハニーと一緒にいれる環境だ!」

と悪びれも物怖じもせずと答えた。こればかりは真剣に言っているようだ。

「…………ふむ。ま〜あ嘘はついているように見えないしここで働かせてもいいよお」

YES!!とセイジは大喜びしエミリアに伝えるべく彼女の方に振り向くと

「エミリア様なら気絶したのでベッドにお運びしました」

と言われがくりと肩を落としたセイジは

「それじゃあしようがなし……………」

と言つてマスクを取り、きゅぽんと間の抜けた音を出した。

ようやく普通に戻ったセイジはポカンとした表情で立ち尽くしていた。

「あれ……………(´▽´)は？」

またしても記憶は無くなっていた。

「ええっ!?!嘘……………だろ……………!?!」

「いいえ、お客様改めセイジ。貴方は無防備なエミリア様に無理矢理キスを……………」

「やめろお！もう聞きたくないから！なんでこんなことに！？ハッスルし過ぎだろ……」

僕は衝撃の事実を受け入れきれずにいた。いや異世界に来た時点でもう十分衝撃的なんだけど今回はその2倍くらいびつくりした。

「まったく貴方本当にさっきの人なの？全然雰囲気違うんだけど」

「そんなの俺が聞きたいくらいだっつーの！……こつちはいい迷惑だよ！」

と僕がため息混じりに言うとか何か悪い事でも思いついたのかピンクメイドのラムがこう言ってきた。

「あら、それじゃあ貴方はエミリア様にキスした事を嫌がってるの？」

なんて事を言うんだこいつは。俺は勿論反論した。

「そ、そんなわけないだろ！？そりゃあ良かったか悪かったかって言われたらいいに決まってるけど……って何言わせてるんだ！？」

僕達がそんなやりとりをしていたのを静かに聞いていた人物がいる事は知る由もなかった。

第5話 緑の変人と鬼とその姉と犬とその2

「んん〜なんていい朝だ。いつも憂鬱だった日々がまるで

嘘のようだよ……！」

「朝から気分がよろしいようです。前の職場はそんなに寝る事が出来なかったんですか？」

「あまり触れないであげて、レム。彼にだつて辛い過去があるのよ……」

「……この2人がいなければ。」

「なあ、朝くらい気の利いた事言えないのか？」

「あら、後輩のクセに生意気なお客様改めマスク」

「そうですよ先輩には敬意を払ってくださいお客様改めセイジさん」

「今明らかにおかしい名前つけた子がいるんだが。マスクとか一ミリもかすつてないんだが。」

「僕が朝からテンションダダ下がりになつているとそれを一気に引き上げてくれる天使が舞い降りた。」

「お仕事慣れてきた？セイジ」

「も、もちろん！もう慣れ過ぎて退屈してきたところだよ！」

「清掃は普通ですセイジさん」

「料理だけは出来るのね」

「とにかく！仕事は順調だよ。早く終わらせて君と一緒に話したいよ」

セイジは疲れからか本音が出てしまい思わず口元を押さえる。

「うん。すごく楽しみにしてるわ！それじゃあまたね」

健気だなあ……。元の世界でもあんな良い子居なかつたよ。

と僕が鼻を伸ばしていると

「ほら、ここはまだ埃がついてるわよマスク」

「そのあだ名なんか危ない気がするからやめて!？」

僕がデレテラムとレムが突っ込む。こんなやり取りが日常になって来た。相変わら

ず仕事に相殺される日々だが今は何か違う。前以上に充実してる気がする。

いや、でもあの日々が無駄だったとは思ってはいないけど。

「あー………そういえばさ、その………」

僕が言葉を濁しているとラムとレムが首を傾げてきた。

「エミリアってあの事覚えてるの?」

「あの事って?」

あれ？もしかしてわざと……あつ今コイツ鼻で笑いやがった！クソツこっちは年上だつてのに………！

僕の様子を見てるのが面白いのかラムは

「えっ？なに？私マスクがなに言ってるか分かんないわ。

貴方がエミリア様に………なんだっけ？」

コイツ……！

アレを………いやダメだ！アレは人を傷つける為にあるんじゃない！まあ多分そんな事しないと思うけど。

現在あのマスクは僕の腰に掛けてある。もしもの時のために備えておきたかったからだ。

でもそんな非常事態は起きてないし良いんだけど。

その日僕らは清掃を終わらせ食事を作りついに仕事が終わりぐったりした顔でベッドにダイブした。

「ああ〜疲れた。もう早く寝たい………今日はあの双子メイドに散々いじられたし買い物しに行ったらなんか犬っぽいやつに噛まれるし……」

今日はもう寝よう。

僕は瞳を閉じ、眠るために何か考え事をしながら横たわっていた。

だがそんな事をする必要はなく既に疲れが溜まっていたセイジはあつという間に寝に入った。

時刻はもう深夜を過ぎている。普通なら大体の人間は寝ているところだ。だが一人だけ、廊下で金属が鳴らす音を出しながら歩いていった。

ガチャリと静かに扉を開ける。まるで起きてもらつては困るかのように

「……………貴方が悪いんですよ。貴方が私達に関わつたから」

そして彼女の武器のモーニングスターを……………!

「そんな事しなくても良いじゃあん……………」

「!?!」

レムは一瞬躊躇い武器を下ろす。もしや気づいているのか…?と警戒している。

「んぐぐぐぐぐぐぐぐぐ〜」

いや寝てる、それは分かった。そして遂に武器を……………

ゴロゴロゴロゴロ……………

セイジはベッドから転がり床へと落ちた。その弾みでテーブルに置いてあったものは落ちた。

「フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!?!?」

突然セイジは声にならない声を上げまるで竜巻のように回転しました。

「これはッ!？」

レムはただ黙って見るしかなかった。得体の知れない敵に下手に手を出して反撃されてはひとたまりもない。

やがてハリケーンのような回転は止んだ。そしてまたあの派手な服を着たセイジもといマスクが現れた。

「やあそこのかわいこちゃん!いくら夜這いとは言ってもそんな物騒なもんは危ないヨオ!」

「くっ…!」

マスクはまるでおちよくるかのような挑発をした。

「そんなに俺ちゃんを殺したい!？」

そういうなりマスクは光速のように移動し、

「ここだよおくん!」

完璧な煽りを入れながら誘導した。

「待てっ!」

レムも負けじと追いかけた。

マスクは森へと入った所で歩みを止めた。

「んくまあここならだいじよぶだナアー!」

「ハア…ハア….: やつと捕まえましたよ…!」

レムはマスクの姿を捕らえ続けるのに必死だったようで未だに少し疲れている、

「わあーママ助けてー! 女の子にイタズラされちゃうー!」

マスクは相変わらずのテンションでふざけてるのに対しレムは怒りを爆発させた。

「ふざけないでくださいッ!! 貴方は何処の王選候補者の間者ですか!? 貴方は一体なんなんですか!? 貴方は….: 魔女教ですか….: ?」

「逆に聞くけどーナんでそんなに俺ちゃんを排除したいわけ? 俺ちゃんこんなに働いてるのに」

それでも態度は崩さずいつも通りのテンションで話を続けた。

「貴方からは忌々しい魔女の香りがしますッ….: !! 私と姉様の故郷と家族を奪った人間が姉様達と仲良くしてのうのうと生きている姿を見るとレムは頭がどうかかなりそうだった….: !」

「えっ俺そんな臭い?」

ポケットから香水を出して身体全体にかけながら聞いていた。

「私があの時姉様が角を折られて喜んでしまったあの瞬間から….: 私には姉様の代わりに頑張らなくちゃいけないんです….: !レムなんて生まれなければ良かった….: !!」

レムが今まで溜めていた思いをぶぎけながらもすっかり聞いていたセイジはため息混じりに口を開いた。

「あのさあ……それはお前だけが考えてる事なんだゾ!? お前の姉様はナア俺が仕事をしっかり出来るようになれば私とレムが楽になるって言ってたんだぞオ!」

そう言われて黙り込むレム。セイジはそして何よりもと話を続けた。

「せつかく生きてんのにそんな償いとかつまんねエだ口!?! 生きてんだから人生を謳歌しろヨ!」

レムはさらに黙り込む。だがマスクは考える時間を与えなかった。

「おい見る病みメイド。これがなんだか分かるウ?」

そう言ってマスクが見せたのは自分の手。だがそこには黒いオーラがあった。

「それって……呪いですか?」

「ノロイだとかトロイだとかトライだとか知らないケドオ」

多分傷のあたりからしてワンコロだな。村の住人が危ないゼ!」

「証拠はあるのですか?」

レムは疑ってかかった。だが今そんな事はどうでもいいとばかりな態度でセイジは言った。

「ドースル!?! ここで言い争ってる間に罪のない子供達が死ぬか助けて英雄の中の英雄に

なるか、サア迷ってる暇は無い here we gaoooooooooooo!!!」

これだけ言われても迷ってるレムに困ったマスクはウーンと唸った。だがこの話を聞いていたのは2人だけでは無かった。

「どうしたの？何か言い争ってる声が聞こえたけど」

「あつマイハニー」

「エミリア様……」

心配そうに2人を見つめる中ラムもやって来た。

「どうしたの？レム、マスク」

「姉様……実は……」

とレムがそこまで言いかけると

「いやー実は村に魔獣が住んでるって聞いて村が危ないってメイドの子が言ってくれたんだけどそんな時に猫と犬どっちが好きかで意見が分かちまってサアー困った困ったワハハハハ!!」

と説明口調で誤魔化した。

「マアそういう事だから早く村に行く事をお勧めするゾオ！」

と急かしまくった。

「待って！私も行くわ！」

とエミリアが言った。だがマスクはチツチツチと人差し指を振り

「いいや、コレはあのクソ犬が魔獣だと見抜けなかった俺の責任ダツ！君は関係ないのさ……」

「なら、私も行きます」

とレムが大きく言った。

「その、えつと……犬派か猫派で討論していたので私にも責任があります。なので私も行きます！」

「レムが行くなら私も行くわ」

とラムまでもが言った。

「姉様は関係ありませんよ！私達2人だけで大丈夫です！姉様はー」

と言いかけるとラムはそれを遮り

「私達は双子でしょ？なら助け合わなきや」

と言った。それを聞いてかマスクはおもむろに泣き始め

「やっぱ姉妹つてイイナア！俺なんて一人っ子だからにいちやん欲しいってずっと思ってたナア！」

「ね、ねえ村が危機なら早く行った方がいいんじゃない……」

とそこまでエミリアが言うのとハツとマスクは気づき

「よしそれじゃいこーぜ！」

そして3人は屋敷を出て行つた。

「あ、あの姉様……………」

「分かつてるわ。貴方の言いたい事は」

えっ？とレムはラムの方に振り返る。

「全く分かつてないわね。そりゃ妬むのも当たり前よ！私だって逆の立場なら多分そうなるわ。でもね、自分をそんなに卑下する事無いわ」

それに、とラムは続けた。

「私自身とても助けられてるわ。レムが凄いいお陰で手間が省けてるし、レムは本当に頑張ってるわ」

「姉様……………」

「さつき言ったでしょ？双子は助け合わなきゃって」

それを聞いた途端レムが今まで抱えていた贖罪の思いは一気に崩れ落ちた気がした。

「なんていい子達なんダア…」

聞いていたマスクは目からありえない量の涙を流し鼻水を垂らしまくっていた。

「……見て！あそこに子供達が……！」

とラムが言った場所を見るとそこには子供達が倒れていた。

「よし！それじゃあ早速助けに行くぜベイビー達！！」

「ちよつと待つてください！もしかしたら魔獣が狙ってるかも……」

レムの予感は的中し、大量の魔獣がマスクめがけて向かってきた。だがマスクは気にすることなく子供全員抱えながらポケットに手を突っ込み

「ウルセエ！！急いでんだこれでも食って口！！」

投げたのは可愛い犬の写真が貼りついている皆ご存知ドッグフード。だが人に呪いをかけ、人からマナを奪って生きる魔獣にそんなものは効かなかった。

「エエー!?ナンデ!?犬なら皆大好きだろうが!!」

「魔獣は犬じゃないです！魔女が作り出した生物です！」

「全く、なんて勘違いをしているのかしらマスクは」

「こんな茶番をしている間にも魔獣達はマスク達に噛みつこうとこちらに向かってきている。

「イヤアアアア!!ワタシ達ここで死ぬんだわ!!」

「下手くそな演技しないで打開策を考えなさい！」

にもかかわらずマスクは笑いながら走っていた。だが彼は急に止まり魔獣達を待ち

構える。

「何をしているんですか!? 止まったら子供達が……!」

レムは彼の突然の行動に戸惑い困惑する。だが彼は親指を立て思い切り口角を上げる。

「心配するなお嬢さん。今のオレは凄く気分がイイ! 今のオレは一味違うってことをこのワンコロ共に教えてやんのさ!」

そう言つてマスクは竜巻の如く辺りを囲うように回転した。レム達は勿論、魔獣達も彼の行動に動けなかった。姿勢を低くし、唸りながら警戒している。やがて竜巻は収まりマスクはいつもの派手なスーツとは違い、白衣を身につけ首に聴診器をぶら下げた。

「サアサアイカにも狂犬病よりもヤバそうなモン持っているワンちゃん達! 見といて寄つといてーこんな田舎臭い世界じゃあ絶対にお目にかかれない世にも珍しいトリマーシヨップダヨオ!?」

そう言つて彼が見せびらかすように両手をパンパン叩きながら見世物のように振る舞う。そこには犬を飼っている人なら一度は行つた事のある動物病院だ。彼はトリマーシヨップと言っているが台や注射器やハサミ、色々な器具が置いてある。

「な、何ですかあれ……?」

「わ、分からないわ……」

レムとラム等は目を丸くしながらマスクを見ていた。

「はいそこのお前ー！お前が初めてのお客様だよー！」

と一匹の魔獣に指を指した。突然指名された魔獣はビクツと身を震わせるが了承を得る間も無く回転しながら近づくと彼に連れられた。

「ウンウンーウンウンウン……………コレはダメです今すぐにも薬を打たないとマズイですぬエ!!」

と言いながら彼はポケットからどう考えてもポケットに入られる容量を超えた凶太い注射器を取り出した。

「今からお前にコレを入れるが、痛みは一瞬よ！何の問題も有りませんわー！」

ズブリと注射器を刺した。

「キャウウウウウウウウウウ……………!?!?」

思い切りケツに刺された魔獣は切ない悲鳴を上げた。すると魔獣は回転し始める。

「大丈夫デースちゃん」と獣医師の免許持ってマゥス

と顔が緑色の血色が悪そうな顔をした免許を見せながら回転する魔獣を見守っていた。

「そろそろカナー」

とマスクは言う。回転は止まり、魔獣の姿がようやくよく見れる。だが魔獣は魔獣とは言えないような姿になっていた。

「えっ!? 魔獣が…」

レムは驚きの表情を浮かべる。それもそのはず、何故なら今の魔獣の姿は……

「とっつても可愛いチワワちゃんですす!」

みんなの愛玩犬、チワワになっていた。魔獣だったチワワは小さいながらも甲高い声で鳴き威嚇している。

「サテサテ……お次はお前等の番サツ! ナアニ心配は要らん! 一瞬で終わるからネ!」

そう言つて彼は音速を超えるスピードで魔獣達に注射器を打つて言った。所々キヤインと悲鳴が聞こえる。そして、

「はい終了〜!」

気がつけば魔獣の巣窟だった森は個性溢れる犬達の溜まり場となつていた。チワワ、ダックスフンド、トイプードル、ゴールデンレトリバー……多種多様の犬種が森の中で闊歩していた。

「さつきまで絶体絶命だったのに……こころも容易く……」

「凄い……」

「お褒めに預かり光栄でございマース!」

マスクは行儀の良い姿勢で礼をし、仮面を外した。

「あ、アレ？なんか少し記憶があるような……」

「お疲れ様でした。マスク改め、セイジさん」

そう言い子供達を守っていたレムはモーニングスターを持ち犬達に近づくと、

「あの一、レムさん一体何を……？」

「何とはなんでしよう？」

ジャラリと鎖の音を立て、犬達に殺意を向けながら歩み寄る。

「いやそれだよそれ！手に持つてるヤツ！それであの子犬達何するつもりかって聞いてんだ！！」

「弱体化している今がチャンスです。今殺せば魔獣達は……」

「そういうトコだよ！！」

セイジは声を大にして言った。

「少しは人を信じなきゃ！あまり記憶は無いけど、アイツ等を可愛い子犬に変えてやった。もうアイツ等が人を傷つける心配はないよ！」

「そんな不確定な事を信じろとでも……？」

レムが退かずに言うときセイジは

「あんな可愛い犬達殺すなよ！！良し分かった！そこまで言うなら証明してやるよ！あの

犬達がなんの危険も無いって事をな！」

彼はそう言つて犬達の中に突つ込んで行つた。

「ほら、怖くないよ。怖くないから、頭を撫でさせてね」

そう言つてセイジは犬に近づく。犬種は柴犬。彼は手を差し伸べ頭を撫でようとする。汗を流し、鼓動を加速させながら頭に乗せる。そして見事撫でる事に成功した。

「良しッ！なつ言つたらろ！」

「凄い汗流してたじゃない」

ラムが指摘するが彼は聞こえないふりをし、次の犬へと手を伸ばした。宣言した通り、彼は全ての犬の頭を撫でる事に成功した。

「ど、どうだア!？」

「…分かりました。ここまでされては、私はもう何も言いません。ですがその犬達はどいうするおつもりで？」

「オレ達が飼うよ」

後ろから不意に声を掛けられセイジはビクツとした。誰だと思ひ振り向いてみると近くの村人達だった。

「えっ!?なんでここに!？」

「あんだだけデカイ音出されちゃ気になつてね、つい来ちまつたのさ」

「いや、警護は……？」

「ああ、なんか突然、身体が動いちまったってどうか、なんつーか……」

「ああ……コイツの仕業か……」

セイジはマスクをチラリと見る。裏面がキラリと光って見えた。

「他の人達にも飼えるか聞いて見るよ。ありがとな。でもアンタ凄えなその仮面つける
といつもそうなのか……？」

「ん？ああなんかコレを付けると力がみなぎって来て、というより本当の自分が出てく
るような、そんな感じがするんだ」

「へ、へえ。そいつあすげえや」

と俺に冷ややかな視線を送る。さてはコイツ俺を病人扱いしてやがるな。

良い雰囲気で終わるような感じになってるけど、俺にはずっと気になってる事があつ
た。この仮面、マスク作った奴って一体……誰なんだ？

場所は変わって夜の静けさが漂うルグニカの商店街。そこを堂々と歩く男が居た。

「来たぜ……あの時は失敗したが今度こそはやるぞ」

「「「おう……！」」」

と3人組の男達は団結する。

「オイ、なんか一人多くねえか？」

「は？そんなわけ……」

と彼等が恐る恐る後ろを振り向くと全身黒一色の男が立っていた。

「うおおおお!!?テ、テメエいつの間に…!!?」

いきなり現れた男にびつくりした3人はビビリながらも虚勢を張る。

「ああ驚かせて悪かったな。いきなりで悪いんだが、あるものを探してる。こんな形をした仮面知ってるか？」

そう言つて男は恐るべきスピードで模写をした。精巧に描かれた紙には緑色の木製の仮面が絵が描かれていた。が、短気なチンピラが盗みの計画を立てている時にいきなり背後に立たれて、ましてや探し物をしていると聞かれれば、ブチギレるのは仕方ない事だろう。

「そんなモン俺達を知るわけねえだろ!クソ順番が狂つちまったがもういい!テメエ、今すぐ金目のモンを——」

襲い掛かろうと三人同時に男を襲つた。が、彼等は知らなかつた。この世には、喧嘩を売つていい相手とダメな相手がいる事を……

「ふう、コイツ等もハズレか……相変わらず人使いが荒いんだよパパは……」

メモ用紙にマジックペンでスツと塗り潰しながらため息を吐く男。彼は壁にめり込んだ3人を一瞥した後、再び歩みを進めた。

「つたくどこ行きやがったんだ？あのクソ魔女め……」

男は文句をブツブツ言いながら夜の街を歩いていった。